

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	EAFONS 2020 に参加して 学会レポート
作成者（著者）	原田, 奈美
公開者	FD委員会 健康科学ジャーナル編集会(東邦大学健康科学部)
発行日	2022.03.31
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 5. p.37 38.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会報告
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohohsj.5.37
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD42088005

EAFONS 2020 に参加して -学会レポート-

原田 奈美

2020年1月10日～11日の2日間、タイ北部の都市、チェンマイにて行われたEAFONS 2020 : 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (第23回東アジア看護学研究者フォーラム) に参加したことを報告する。

EAFONSは、日本、韓国、シンガポール、台湾、香港、フィリピン、タイの参加国によって毎年行われている看護学系の学術集会である。第23回はタイのチェンマイ大学が主催し、テーマは、‘Advancing Nursing Scholars in the Era of Global Transformation and Disruptive Innovation’ (グローバルな変革と躍進時代における看護学の発展) であった。EAFONSでは看護研究発表の他に、様々な教育講演やシンポジウム、ワークショップ等が行われることも魅力の一つである。今回も興味深い内容のイベントが数多く開催された。まず基調講演では看護学分野における大学院教育の意義や今後の展望に関する内容の講演があり、看護学研究者も高学歴化しているだけでなく、臨床看護においてもより科学的思考へと進歩していることが強調された。また、各国の博士後期課程による論文執筆までの苦労話やモチベーションの維持の工夫を聞いて、どこの国の学生の苦労も同じなのだと共感した。次にEBHC: Evidence-based health careに関するランチョンセミナーでは、オーストラリアのアデレード大学にあるJBI: Joanna Briggs Instituteから、Kylie先生が最新医学のエビデンスの構築について講演され、GRADE: Grading of Recommendations Assessment, Development and Evaluation (エビデンスの質の評価システム) に関する理解を深めた。他に、混合研究方

法に関するセミナーでは、質的研究が中心となる看護学研究の中で結果の信ぴょう性を重視した量的研究との融合、さらに両研究法の理論的対立といったジレンマや、これからの混合研究法の展望といった内容が興味深かった。質的研究と量的研究をミックスにすれば混合研究となるわけではないこと、混合研究法の中でも研究目的によっていくつかの種類があること、使い方によってはよりエビデンスの高い結果を導き出せるという可能性について学んだ。今後は混合研究法を使った研究をしてみたいと思った。



写真1. 共著者の青木先生と

またEAFONSのもう一つの醍醐味は、ランチタイムとティータイムである。開催国の料理やデザート、フルーツがビュッフェ形式で提供される。しかもブレイクタイムは午前と午後1回ずつあるので、学会中は常に満腹状態である。EAFONSに参加すると必ず体重が増えて帰っ

てくることがわかっていたので、今回は空き時間には学会会場のプールで泳ぎ、身体面も整えることを意識した。またブレイクタイムは食べるだけが楽しみではない。他の参加者との交流ができるチャンスである。今回も一緒にティータイムを楽しんだ先生が、前日に聞いた講演のご高名な先生であることが判明してビックリしたという出来事があった。他にも、出展ブースではベビーマッサージの紹介を見た。タイではまだベビーマッサージは普及していないようであった。日本ではいわゆる「ベビマ」は有名で、産後に取り入れている施設や、産後ママ達のサークル等があることを話すと驚いていた。

私は今回のEAFONSでは、**A literature review focused on women's informed choice and influencing factors about prenatal genetic screening in the Asian region**というタイトルで、アジアにおける妊婦の出生前スクリーニングに関するインフォームドチョイスに関する文献検討についてポスター発表した。これに対して参加者からは、日本の出生前スクリーニングのシステムに関することや、この結果を踏まえて何を看護に活かしていくのか?といった質問があった。本当は自分の研究と同じような研究テーマを持つ人と出会いたいと思い、会場に貼られたポスターを閲覧したが、出生前検査やその意思決定に関する発表は見当たらなかった。

そしてあっという間に2日間のEAFONS 2020が終了した後は、チェンマイ大学のPatraporn先生のホームパーティーに参加させていただいた。Patraporn先生はJBIのトレーナーでもあり、私が2018年にJBI主催のSystematic Reviewのトレーニングコースを修了した際の担当講師であった。またEBHCの講演をされたJBIのKylie先生のお誕生日が近かったこともあり、大きなデコレーションケーキでサプライズのお祝いをした。そのパーティーでは、タイ、インドネシア、日本等のJBI認定施設の看護系大学の先生方や大学院生が20名以上参加し、タイ北部の郷土料理やお酒を楽しみながらそれぞれの研究のことや仕事について話した。皆向上心が

高く、刺激的であった。こうして今回のEAFONS参加は自らの勉強となっただけでなく、参加者の交流においても充実したものとなった。

最後に、今回のEAFONS 2020は東邦大学健康科学部の研究特別助成を使用して参加することができました。このような貴重な体験をさせていただきまことに、厚く御礼を申し上げます。



写真2. チェンマイで有名な Wat Chedi Luang